

第二分科会

テーマ ～ エンパワメントを高める ～

参加者 48名

司会:心身障害者センター 山本 良典

記録: 益子 知恵

話題提供Ⅰ (社福)特別区人事・厚生事務組合 更生施設 淀橋荘 田村 勝氏

〈内容〉「 更生施設淀橋荘における軽度・境界域の知的障害者への支援について 」

淀橋荘は生活保護法の更生施設。入所70名、通所・訪問35名定員。単身の男性が対象。平均入所期間は9ヶ月で、疾病の治療、アパート生活の準備等、何らかの目的をもった方が利用している。

知的障害者の利用も少なくないが、職員に支援のノウハウがなかった事等から支援プログラムを検討し始めた。支援に活用するアセスメントキット(チェックシート・心理相談等)、アパート生活のしおり、生活支援マニュアルを作成し、内容については現在も検討中。21年3月に最終報告を施設ホームページに掲載予定。

施設に入所してくる知的障害者の特徴として、家族からの支援が期待できない、健常者として生きてきており手帳未所持(申請希望もない)、偏った生活スキル、生きにくさを抱えている等がある。生活保護施設においても障害特性を考慮した支援が望まれる。

地域生活を継続し、ホームレスに戻らない生活の構築を目標にしているが、生きがいや娯楽的な内容の検討が今後の課題だと感じている。また、本プログラムはIQなど重大な個人情報を取り扱う内容なので、倫理的な精査を継続する必要がある。

軽度の障害者支援はこれからニーズが高くなると思う。縦割りの支援では限界があるので、障害福祉関係者とも連携しながら取り組んでいきたい。

話題提供Ⅱ (社福)武蔵野 地域生活支援センタービーと 施設長 植村 由紀彦氏、大久保 さらさ氏

〈内容〉「 08 サマーセミナーの取り組み ～本人学習会の開催～ 」

ビーとは15年前より相談支援を行っている。現在は相談支援事業、地域活動支援センター事業、市民向け事業の3本柱で自立支援法に基づいて事業展開している。

本人学習会のきっかけは、利用者Aさんの再就職先でのトラブルだった。就労支援部門より社会性を身につける機会を作ってほしいとの依頼があり、準備を進めるうちに、同じような問題を抱えている人が少なくないことがわかり、個別支援に加えて学習会を実施することにした。

まず、家族と関係機関職員を対象に事前学習会を実施している。意見を伺った上で、本人学習会の内容を決定した。本人学習会(全3回)のテーマは、それぞれ①考えよう、相手の気持ち(人間関係全般)、②試してみよう、イカしたマナー(ビジネスマナー)、③身につけよう、グーッなお付き合い(異性との付き合い)。ロールプレイ、O×ゲーム等、身近な課題を設定することで参加しやすい内容になるよう工夫した。

学習会にはのべ24名が参加。この学習会は企業の職員、他機関職員との連携をとるきっかけにもなっている。

軽度の知的障害を持つ人は目先の興味や関心に左右されてしまう傾向があるが、普段の生活ではそうした傾向を注意されるだけで、どうすれば良いかを学べる機会が少ない。学習会は、参加者同士で相談・学びあう機会となった。できる、できない、させる、させないだけでなく、本人が自ら考えて行動できるように支援することが、地域生活のベースになると思っている。

《フロアとの意見交換》

○ビーとの「本人学習会」に参加した方の具体的な変化について知りたい。

- ・ 外出企画で、学習会参加者が写真を撮る前に「撮ってもいいですか？」と事前に断る場面が見られた。学習会でのロールプレイの影響が大きいと思う。

○淀橋荘利用者で「手帳を取りたがらない人」について詳しく聞きたい。

- ・ 本人がメリットを感じないから取らないのだろうと思う。こちらから見るとかなり過酷な状況で生活していても本人はそう思っていない場合がある。また「自分はずっとがんばってきたんだ」というプライドもある。「知的障害」に対していいイメージを持っていない人もいる。こういった方に納得してもらうのは難しい。
- ・ 手帳がなくても「手帳に相当する人」として支援できればよいと思う。
- ・ 手帳があると、知的障害に考慮した支援を期待できる。

○重度重複障害の方のケアプランについてアドバイスがあれば伺いたい。

- ・ ビーとではステージに応じた支援を切れ間なく作れるように機関連携の見直しをしている。
- ・ トータルでその人の生活、人生を考える機関が必要だと思う。自立支援協議会を活かす事や今より広い視野をもって総合的に支援が行われる仕組みづくりを相談支援機関として目指していきたい。

○「障害」を利用者にどう伝えるべきか。(淀橋荘)

- ・ 利用者のアセスメント後、知的障害が疑われた場合、それをどう本人に伝えるかが議論になっている。うまく伝えられず、本人との関係が悪くなった時代もあった。
- ・ 障害のことを本人は認識していても「周りには言ってほしくない」という人がいる。例えばてんかんの人がいて、今後の通院について考えていかなければならない状況にあっても、本人からその話題が出てこないのに対応に苦慮しているケースがある。
- ・ 本人に「あなたには障害があります」という言い方はしない。「理解しづらいことはないですか」「読みづらいところはないですか」等といった意見交換をとおして、本人の口から生活しづらい部分を出してもらえるようにしている。

○知的障害の方の金銭管理はどこが担っているのか。

- ・ 淀橋荘でも金銭管理は大きなウエイトを占める。通所支援の期限が2年なので、退所後の金銭管理は大きな問題になっている。
- ・ 施設やグループホームの利用者は職員が、生活保護の方はケースワーカーが支援しやすいが、アパートで単身生活をされている方の金銭管理は難しい。金銭管理のどこに支援が必要かということの判断も難しく、「自分のお金なのに指図されたくない」という本人の声もある。

○淀橋荘退所後の利用者の支援はどうなっているのか。

- ・ 作業所や通勤寮につながれば安心だが、アパートに行く方が多い。その場合、ケースワーカーが支援することになるが、厳しい状況の方も少なくない。

○当事者の自主サークルについてアドバイスを伺いたい。

- ・ ビーとも試行錯誤でやっているが、今は「本人の自主性」を意識している。職員が企画するのではなく、「やってみたい」という本人の声に、機会だけを作るスタンス。

○年配の知的障害者へ接するときの配慮について伺いたい。

- ・ 本人の気持ちを聞かせていただきながら接することを年齢を問わず基本としている。
- ・ 年配の方の場合、集まりへの参加には引き気味になることも多い。その場合は個別対応がメインになる。法人内の高齢部門との連携を図りながら支援していきたい。